

WHAT

フランス・パリ・ディドロ大学

文教育学部 芸術・表現行動学科
グローバル文化学環 3年
森田真奈子

フランス留学を終えてまず思うことは、フランスへのイメージが大きく変わったということです。フランス人はプライドが高く冷たい…出発前はそんなステレオタイプを持っていましたが、初めて現地を訪れて見えてきたのは、人間味にあふれる寛容な人々の姿でした。

フランス留学の最初で最大の難関は、出発前のビザ取得などの手続きでした。結局ビザの取得ができたのは既に授業が開始した後。さらに、直前になって最初の2週間は寮の部屋がないと言われた時には途方に暮れ、こんな所に留学したくないと思うほどでした。オリエンテーションや履修登録期間も逃し不安だらけのスタートでしたが、そんな状況の中で困惑する私を助けてくれる多くのフランス人と出会いました。人の親切が本当に身に染みる体験でした。



授業に関しては、東アジア学部の授業や英国の脱植民地化と国際関係、フランス語の語学授業を2つ受講していました。日本の現代社会の授業では、貧困問題とジェンダー問題をテーマに据え、社会の閉鎖性やマイノリティに対する

差別などを詳しく扱っていたので、日本社会を見る新たな視点を得られたと思います。また、フランスの授業では、課題等はほとんど出されず予復習や文献購読などを自分で進めなければならない点や、試験では短い問題文に対してひたすら論述しなければならない点が難しかったです。授業外では、学内外の日本人とフランス人の交流サークルに参加していたため、常にフランス語を話す機会も作れ、休日にはメンバーのお家に行ったり、公園でピクニックをしたりと楽しい時間を過ごすことができました。また、フランスは学生に対する様々な割引があり、大の音楽好きの私は5~10ユーロの学生券を手に入れて週に一回はコンサートに通っていました。

フランスの生活で興味深いと思ったのは、フランスの多文化主義です。フランスでは出別別の統計をとること自体が差別として禁止されているため、正確な移民の割合はわかりませんが、フランス全土では約25%、パリでは半数以上が移民または外国人ではないかと言われています。一方で、フランス語に対するアイデンティティはとても強いため、フランス語を話せないとコミュニティに入ることが難しく、逆にフランス語を話せると見た目に関わらずフランス人のように扱ってくれます。多種多様な人々が共生する国際都市で過ごせたことは、とても新鮮な経験でした。

出発時から大変なトラブルに見舞われ、ストレスの多い滞在でしたが、それでもパリに戻りたくなるのは、非常に無秩序ながら何もかも受け入れる寛容さを持ち合わせた都市だからだと感じます。多様性を認めながら自分の価値観を大切にする。そんなフランス文化に魅了されながら、前向きに成長できた6ヶ月間だったと思います。